

# ドストエフスキー『罪と罰』研究-ラスコーリニコフはいかにして創られたのか-

著者	外田 裕一郎
号	2
学位授与番号	26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/36868">http://hdl.handle.net/10097/36868</a>

# そと だ ゆう いち ろう 外 田 裕 一 郎

学 位 の 種 類     博 士 (国際文化)

学 位 記 番 号     国博 第 26 号

学位授与年月日     平成15年 3 月24日

学位授与の要件     学位規則第 4 条第 1 項該当

研 究 科 ・ 専 攻     東北大学大学院国際文化研究科 (博士課程後期 3 年の課程)  
国際文化交流論専攻

学 位 論 文 題 目     ドストエフスキー『罪と罰』研究  
— ラスコリーニコフはいかにして創られたのか —

論 文 審 査 委 員     (主査)  
教 授 田 中 継 根     教 授 栗 林     均  
教 授 石 幡 直 樹  
教 授 佐 藤 勢 紀 子  
助 教 授 加 藤     弘  
助 教 授 澤 入 要 仁

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 1. 研究の目的

『罪と罰』(1866)は、フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー(1821-1881)の全作品の中で、ある意味で異彩を放つ作品であると言える。その大きな理由は、主人公ラスコリーニコフが、殺人という罪を犯したにもかかわらず、最後には信仰を得て復活を遂げるという、ドストエフスキーの作品にはあまり見られない、ハッピーエンドの幕切れとなっていること、そして、処女作『貧しき人々』(1846)から『罪と罰』までの間には、作品の中心に描かれた登場人物の成長、発展の道筋を感じ取ることができるのに、『罪と罰』に続く長編である『白痴』(1868)の主人公ムィシキンとラスコリーニコフとの間には、性格的な継承関係(本稿では、比喩的に係累関係と呼ぶことにする)が薄いと考えられることである(ラスコリーニコフは傲岸不遜な人物として、ムィシ

キン(ジェーヴシキン)は謙抑で道徳主義的な人物として描かれている)。これらの特徴を踏まえた上で、ドストエフスキーの創作活動の中で『罪と罰』を正しく位置付けるために必要なことは、処女作から『罪と罰』に至る作品群を、その構造分析に重きを置いて考察する中で、処女作で中心的に描かれた登場人物が、いかなる道筋を辿ってラスコーリニコフへと成長し、挫折を経て、それまでとは別の存在へと生まれ変わったのかを究明することである。すなわち、作品の構造と、そこに描かれた登場人物の性格(この二つは密接に結びついている)の両方を分析することによって、『罪と罰』までのドストエフスキーの創作姿勢の発展過程を探ることを研究目的とする。本稿では、『罪と罰』を、処女作からの連続したテーマの流れの中で捉えることを試みるが、ドストエフスキーの処女作と中期の作品の間にテーマの連続性を読み取ることは、他の作家を研究する場合には必ずしも見られない、複雑な問題が存在している。それは、両作品の間に、およそ4年間のシベリア流刑生活(1850-1854)という創作活動の中断が挟まれていることによる。先行研究は概ね、『貧しき人々』と『罪と罰』はもちろんのこと、流刑以前と流刑以後の作品の間に、作家の世界観の変化、すなわち、人道主義的思想からの脱却による不連続な関係を認めている。しかしながら、流刑を挟んだ作品に、たとえ作家としての成長に由来する不連続な部分があるにせよ、それは表層部分に限られており、作品の深層においては、空想家による空想の世界から現実の世界への移行の試みとその挫折という、処女作からのテーマが不動のものとして存在していると考えられる。したがって、ジェーヴシキンからラスコーリニコフの間には、空想家の系譜が形作られ、そこに列する空想家たちの、進化論的把握が可能となる。ドストエフスキーが描いた主要な登場人物たちを、共通項で括り、系譜的に捉えた研究では、ペレヴェルゼフによる研究<sup>1</sup>がよく知られている。ペレヴェルゼフは、ジェーヴシキンから『カラマーゾフの兄弟』(1879-1880)のイワン・カラマーゾフに至る登場人物たちを、人格に分裂を来した「二重人」(двойник)として一括し、それをさらに「我意の人」(своевольные)と「温順な人」(кроткие)とに分ける把握を試みている。しかし、「二重人」を産み出したものとして、環境的要因を第一義とするその論には、社会主義的偏向が見られ、今となっては再考すべき点が少なくない。確かに、人格の相克は、ドストエフスキーが固執した空想家の特徴の一つではあるが、貧困や環境をその原因とすることは必ずしもできず、また、ペレヴェルゼフによる類型化は筆者のそれと大筋において重なるものではない。ほとんどの先行研究と筆者の研究とのそもそもの相違点は、空想家の系譜の最初に位置するジェーヴシキンを、「美しい人間」とは捉えないことにある。この点で、筆者の主指導教官である田中継根教授の論文「『貧しき人々』について」(『東北大学教養部紀要』第53号、1988年)は、筆者に大きな示唆を与えたことを告白せねばならない。その論文の中で、田中教授は、二人の主人公であるジェーヴシキンとワルワラを、

<sup>1</sup> Переверзев В.Ф. Гоголь. Достоевский. Исследования, М., 1982.

「必ずしも美しい魂の持ち主などとは言えない」とし、特にジェーヴシキンに対しては、「常識的判断力を欠いた間抜けに過ぎない」と極めて否定的な捉え方をしている。ジェーヴシキンを否定的に捉えた研究は、他には、中村健之介氏の『ドストエフスキー・作家の誕生』（みすず書房、1979年）と、部分的にはあるが、清水正氏の『ドストエフスキー初期作品の世界』（沖積舎、1988年）を数えるのみである（外国における研究は、筆者の知る限りはない）。ほとんどの先行研究は、『貧しき人々』を、清らかな愛で結ばれた男女が、貧しいが故に引き裂かれる哀話として捉えている。そして、主人公ゴリャードキンの狂気を滑稽に描いた第二作『分身』(1846)や、反英雄<sup>アンチヒーロー</sup>としての見方が定着している（筆者もそれに異論はない）地下室の男を主人公とする『地下室の手記』(1864)、そして、『罪と罰』といった後に続く作品との間に、テーマの連続性を見てはいない。先行研究が『貧しき人々』から『罪と罰』までの作品のうちに見てきたことは、ドストエフスキーの描く主人公の多くは人格の分裂を特徴としていること、そして、例えばジェーヴシキンの隣人ゴルシコフは『罪と罰』に登場するマルメラードフの原型であるといった、脇役的な登場人物の形象の類似であって、テーマの連続性ではない。田中教授は、「ペチョーリンの「地下室」」（『木村彰一教授還暦記念論文集』、朝日出版社、1976年）の中で、地下室の男が娼婦リーザに去られたことについて、「リーザとの出会いは地下室の男が地下室を放棄するための最後のチャンスであった」と述べている。地下室とは、空想の世界を表している。地下室の男のみならず、ジェーヴシキン、ゴリャードキン、『白夜』(1848)の主人公、ラスコーリニコフらがみな女性を強く求めていることから、空想家が現実の世界へと移行することには、それを手助けする存在として、女性が大きな意味を持つことが考えられる。自ら空想家であると名乗る『白夜』の主人公や、莫大な遺産が手に入るや仕事をやめて地下室にこもった地下室の男は、先行研究において、空想家としての扱いを受けるのがふつうである。だが、ジェーヴシキンやゴリャードキン、そしてラスコーリニコフまでを空想家として一括りにした研究は、あまり見られない。『貧しき人々』のジェーヴシキンにおいて、美質を持たぬも成長の可能性を秘めた人間として創造された空想家が、住み慣れた空想の世界からの脱出、言い換えれば、自らの運命の転換を目論んだ試行錯誤を重ね、ラスコーリニコフにおいてそれに成功したとする見解を筆者はとるが、そのような見解と一致する研究は、筆者の知る限りはない。本稿では、この見解をテキストの細部から論証することを試みる。

## 2. 研究の方法

ミハイル・バフチン（1895－1975）の出現は、ドストエフスキー研究の流れを大きく変えたと言ってもよい。ローザノフ、ウォルィンスキー、メレジコフスキー、シェストフといった、ロシアにおけるドストエフスキー研究の草分けたる面々が携わってきたのは、専ら、作品に描かれた思想につ

いての考察であり、それも特定の登場人物の吐露する思想が作者のそれと同一であると想定してのことであった。そこでは、作品の構造分析はないがしろにされていた。しかし、バフチンは、ドストエフスキーの作品を哲学的なモノログとして扱うことはできないとし、互いに独立した声たちによるポリフォニーとしての多元的な把握こそが、その作品世界の独自性を明らかにし得るとして、『ドストエフスキーの詩学』(1963)<sup>2</sup>を著した。だが、そこでは、作品に内在する思想的、哲学的側面は、そのほとんどが切り捨てられていた。ロシアの文芸学には、バフチンやシクロフスキーによって確立された詩学派の他に、神話学派、文化歴史学派、心理学派、比較文学派、マルクス主義学派といった学派が存在する<sup>3</sup>。筆者の研究方法は、歴史的背景や伝記的事実に拘泥せず、テキストに記された内容を細部まで読み込むことで、先行研究によって見落とされていた問題点を洗い出そうとするものである。したがって、方法論としては、詩学派のそれに近いとは言える。ただし、テキスト論的見地からドストエフスキーの作品の研究に携わる者の多くが、いまだにバフチンの強い呪縛から逃れられずにいることには、問題を感じずにはいられない。そもそも、文学研究の方法論においては、読み手の一人一人に個性がある以上、先人のものを（それがいかに影響力の強いものであったとしても）踏襲することには慎重にならねばならぬはずである。また、バフチンがその著作からイデオロギー臭を払拭せねばならなかった背景には、当時ソビエトの厳しい検閲事情があったことがわかってきている。以上の点を踏まえて、本稿では、バフチンやシクロフスキーの偉大さには敬意を払いつつも、彼らの思考の枠組みや、「カーニバル」や「異化」といった彼らの用語を借用することなしに、作品の一字一句に拘るクローズリーディングによって、作品がいかに作られているのかを明らかにする。作品の細部に拘った先行研究の中には、考察された細部同士の連関性を欠いたものや、注釈作りに終始したものが間々見られる。本稿では、作品の細部を常に全体と関連付けて考察し、木を見て森を見ずの弊には陥らぬよう心掛ける。

バフチンが批判した後も、ドストエフスキーのある種の作品、例えば『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』の研究において、登場人物の思想が、作者のそれと同一視され、それらの作品が、あたかも思想書であるかのような扱いを受けてきたことは否定できない。特にラスコーリニコフによって抱かれる、いわゆる‘凡人非凡人の理論’は、ニーチェ哲学における超人の概念を先取りしたものであるとして、研究者の多くが目を見奪われがちなものであると言える。その結果、‘凡人非凡人の理論’こそは、ラスコーリニコフを金貸しの老婆の殺害へと導いた要因であるとして、思想犯としての、彼の理知的な側面だけに光が当てられてしまう。このような一面的な把握の仕方からは、ジェーヴ

---

<sup>2</sup> 『ドストエフスキーの創作の諸問題』(1929)を大幅に改訂したもの。尚、バフチンのドストエフスキー論が日の目を見るのは、スターリン死後の1950年代後半になってからである(ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳(筑摩書房、1997年)584頁)。

<sup>3</sup> 井桁貞義『ドストエフスキイ』(清水書院、1996年)5-6頁。

シキンやゴリャードキンといった知的であるとは言えぬ登場人物とラスコーリニコフの係累関係は、曖昧なものとなる。テキストとは、縦糸と横糸の複雑な絡み合いから成る、まさに織物=texture のようなものである。よって、登場人物の思想は、テキスト全体との不可分な関係の中で捉えられるべきであり、語義は文脈から決定されることから、テキストから思想だけを切り取ってその意味内容を論ずることは、研究方法として適切ではないと考えられる。こういった点に留意しつつ、テキストを丁寧に解きほぐし、ラスコーリニコフの形象を多面的に捉えることを試みる。

### 3. 論文の構成

『罪と罰』までのおよそ20の作品群の中から、テーマ、中心的登場人物の性格、構造の面で、『罪と罰』への継承性の濃い作品を選んで細かな分析を行う。その際、我が国の古今の先行研究を取り上げて、その問題点の指摘を行うことはもちろん、ペレヴェルゼフ（1912）、モチュールスキー（1947）、シクロフスキー（1957）、グロスマン（1962）による研究（これらは、ドストエフスキー研究の古典と目されながらも、その内容が十分に批判検証されているとは言えない）、そしてさらに、アメリカにおける、テラス（1969）やフランク（1976-1995）による研究を祖上に載せる。第1章では、従来の『貧しき人々』解釈を批判検証し、『貧しき人々』をどのように読むかが、『罪と罰』解釈にまで波及する問題であることを明らかにする。第2章と第3章では、これまで筆者によるような形では指摘されてこなかった、『貧しき人々』と『分身』のテーマの連続性、そして、『分身』と『罪と罰』のテーマの連続性を指摘することで、最初期の二作品と『罪と罰』が、流刑を挟むにもかかわらず、連続的な関係にあることを明らかにする。第4章では、ラスコーリニコフの犯行を、処女作からのテーマの中で捉えることにより、『罪と罰』の作品世界を深く掘り下げることを試みる。第5章では、『白痴』の主人公ムィシキンとその典型とする「美しい人間」は、ジェーヴシキンやラスコーリニコフとは異質なものであることを、『死の家の記録』（1862）のテキストから証明することを試みる。第6章では、ラスコーリニコフの分身的存在とされるスヴィドリガイロフを分析することによって、空想家が女性を必要とするものの意味を解明する。そして、空想家による空想の世界から現実の世界への移行の試みとその挫折という、処女作から受け継がれたテーマの射程には、ドストエフスキーによって、神との合一が見据えられていたという見解をもって、本稿の結びとする。尚、本稿は、序論、第1章～第6章、結論、参考文献によって構成され、A4横書き222頁からなる。

## 4. 研究の結果

### 第1章 『貧しき人々』解釈の諸問題

### 第2章 『貧しき人々』論

ドストエフスキーの処女作『貧しき人々』は、ドストエフスキーに文壇デビューのきっかけを与えたベリンスキー、ドストエフスキー研究の礎を築いたモチュールスキーやグロスマンによって、主人公の一人であるジェーヴシキンの過度な美化がなされ、人道主義に則る作品であるとされたが、そのような解釈の残滓は現在も根強くある。だが、『貧しき人々』は、ほとんどの研究者によって誤解されているように、清らかな愛によって結ばれた男女が、‘貧しさ’という不可抗力によって引き離される悲劇の物語であるとは言えない。ジェーヴシキンとワルワラが、交わし合う書簡の中で、「幸福」と「不幸」という語をいかに用いているかを調べてみると、二人の間に最初から存在した幸福観の齟齬が、最後まで解消されていないばかりか、ジェーヴシキンによって察知すらされていないことがわかる。このことから、彼らは、ワルワラの結婚相手である裕福な地主ブイコフの出現によって、意に添わぬ別れを強いられたわけではなく、二人の間に最初から存在した内面的な溝が深まることで、破局が必然的に訪れたことが考えられる。また、ジェーヴシキンは、「純粋な父親らしい情合い」を抱いてワルワラに対していと述べているものの、テキストからは、善良な仮面の下に隠された彼の独善的な願望が浮かび上がってくる。ドストエフスキーの人道主義との決別が作品に最初に現れるのは、流刑後の『虐げられた人々』においてであるとされることが多い。ほとんどの研究者は、ドストエフスキーがその若き日に、サン＝シモンやフーリエらの空想的社会主義に手を染めたことに対する拘泥から、『貧しき人々』の中に人道主義的思想を見出そうとする。しかし、テキストに記された内容を忠実に読むならば、『貧しき人々』の作品世界は、人道主義という言葉では掬いきれないものであると言える。

『ペテルブルグ年代記』（1847）の中のドストエフスキー自身の説明によれば、「活動を渴望し、直接的な生活を渴望し、現実を渴望していながら、弱く、女性的で、優しい性格の中には、次第に、いわゆる空想癖が形成されてくる」。そして「空想家」の出現を見るのだが、「空想家」は、「群集を避け、共通の利害を避けるようになり、次第に、気づかぬうちに、彼の中で現実生活の才能が鈍ってゆく」。そして、先行研究ではあまり指摘されないことであるが、ドストエフスキーは、「空想家」を、「悪夢」や「罪悪」、「悲劇」と呼んで、明らかに否定的に捉えている。「空想家」が何よりも恐れるものは、空想からの「覚醒の瞬間」である。あたかも空気に触れた金属が酸化するように、一度空想の世界から外へ出た「空想家」は、もはやもとの状態に戻ることはできないのである。

### 第3章 『分身』と『罪と罰』を繋ぐもの

『貧しき人々』の中に、ジェーヴシキンとワルワラに対して注がれるドストエフスキーのヒューマンな眼差しを見たほとんどの研究者は、主人公ゴリャードキンの破滅を諧謔的な筆致で描いた第二作『分身』との間に、テーマの連続性を見出し得ず、『分身』を、E・T・A・ホフマンやゴーゴリの亜流として、試作的な評価を与えるに留まっている。しかし、『貧しき人々』から『罪と罰』までのドストエフスキーの創作活動を、美質を持たぬも成長の可能性を秘めた空想家による、空想の世界から現実の世界への移行の試みとその挫折という、一貫したテーマの下で捉えるならば、ジェーヴシキンが美しい人間として描かれなかったという、まさにそのことが、『分身』以降の作風を展開せしめる要因となったことが考えられる。ジェーヴシキンの書簡に見られる、指示対象の明確でない「悪人たち」や「敵たち」、あるいはそれらの代用である「彼ら」といった用語法は、『分身』のゴリャードキンの場合にも共通して見られ、ジェーヴシキンの妄想的な敵意（この敵意は、ついにワルワラから理解されない）が、『分身』の作品世界へと受け継がれていることが確認できる。そして、さらには、『罪と罰』のラスコーリニコフによる老婆殺しも、この敵意の延長線上にある行為であることが推測される。『貧しき人々』において、ジェーヴシキンとワルワラの破局は、空想の中での自己中心的な交際から脱け出ることのできなかったジェーヴシキンの側の問題、すなわち、彼のコミュニケーションの不能に多く起因するものとして描かれていることが考えられる。このことから、ジェーヴシキンに犠牲愛を見るほとんどの先行研究によって見落とされてきた、必ずしも肯定的意味を持たない彼の特徴が、ゴリャードキンやラスコーリニコフに相通ずるものとして、いくつか浮かび上がってくる。そのうちの主要なものとして、不測の事態に遭遇したにもかかわらず、それを「予感していた」と思い込むことが挙げられる。このことには、‘偶然’の事態を‘必然’のものと捉えることで、心のバランスを保とうとする彼らの意図を感じ取ることができる。例えばゴリャードキンは、最後に癲狂院へと送られる際にも、「このことを、もう前から予感していた」と感じる。これは、分裂が招いた「不幸」と戦う彼の非敗北宣言であると考えられ、ゴリャードキンの運命に対する挑戦的な姿勢は、ラスコーリニコフへと継承される。「運命」という語に注意しながら作品を読めば、以下のことが明るみになる。ゴリャードキンの舞踏会闖入の場面、そして分身出現の場面には、「まるで誰かが、彼の内部で、何かのばねに触ったかのように」、「まるで何か外部の力に動かされているようだった」という描写が見られる。そして、ラスコーリニコフが犯行へと引き寄せられる場面にも、「まるで誰かに強いられてあのこと（老婆を殺害すること——外田）に引っ張られていくかのように」、「まるで誰かが、彼に取り入っているかのように」という、ゴリャードキンの場合と非常によく似た描写が見られる。『分身』における「誰か」は「宿命」を、『罪と罰』における「誰か」は「運命」を意味することが、テキストから論証できる。このことを踏まえて、『貧しき人々』まで視野を広げれば、「これ（ワルワラに貢ぎ続けて破産し、



酒に溺れていること——外田)はもう、運命で決められたことであって、私に罪はありません」と告白するジェーヴシキン、「このこと(分身との間に生じた反目のこと——外田)すべてにおいて運命を責めることにしましょう」と述べるゴリャードキン、「自分の運命の定め」を感じ取って老婆を殺害したラスコーリニコフの間に、発展的な関係が浮かび上がってくる。彼らはいずれも、自分が抗いがたい「運命」の支配下にあることを自覚している(ゴリャードキンとラスコーリニコフの「運命」に対する順応は、「機械的に」という彼らの動作を修飾する表現で示される)。ジェーヴシキンは、ワルワラを彼女の結婚相手であるブイコフから奪い返そうとせず、したがって、運命に抗することを試みはしなかった。しかしながら、ゴリャードキンは、招かれぬ舞踏会への潜入という形で片思いの女性クララの奪還を試みたばかりか、分裂が招いた不幸に対して手をこまねく姿勢を放棄し、分裂からの脱出、すなわち、自らの運命を打開するための行動に乗り出している。ラスコーリニコフもまた、「あるがままの運命を、従順に、永遠に受け入れる」ことを拒否して犯行に及んでいる。『分身』と『罪と罰』には、「踏み越える」や「またぐ」、「一歩前へ踏み出す」といった共通した‘歩行’の表現が見られる。それらは、ゴリャードキンとラスコーリニコフが、いずれも、空想の世界から脱して現実の世界へと移行することを示唆する表現であると考えられる。このように、ドストエフスキーの作品の中では低い評価を与えられがちな『分身』は、処女作と『罪と罰』を橋渡しする重要な位置にある作品であることが明らかである。

#### 第4章 ラスコーリニコフの犯行が持つ意味について

ラスコーリニコフの思想は、‘一つの小さな犯罪は、何千という善行によって贖い得る’という理論と、‘あらゆる人間は、自然の法則によって、凡人と非凡人とに分けられており、非凡人は、全人類に益をもたらすためならば、それを邪魔する凡人の生命を自らの良心に従って犠牲にすることができる’という理論の二つに分けることができる。先行研究により、呼び方は多少異なるが、本稿では、前者を‘算術の理論’、後者を‘凡人非凡人の理論’と呼ぶことにする。ほとんどの先行研究において、ラスコーリニコフによる老婆殺しは、彼の思想、特に‘凡人非凡人の理論’によるものとして意味付けされ、ラスコーリニコフは、そのニヒリスティックな思想傾向から、『地下室の手記』の主人公との係累関係の中で捉えられている。しかしながら、『罪と罰』の作品世界を、処女作からのテーマにおいて捉えるならば、ラスコーリニコフを、その抱懐する思想から地下室の男の発展形態とするだけでは十分であるとは言えず、空想家である彼の犯行を、ジェーヴシキンやゴリャードキンに端を発する、現実の世界への移行の試み、あるいは、‘運命を変える’ための試みとして理解する必要が生じる。また、ニーチェの思想やファシズムの先駆として仰々しく捉えられがちな‘凡人非凡人の理論’も、『分身』と『罪と罰』に見られる「良心」についての記述から、「良心を落ち着かせ」、「自己を正当化」するのに役立てられたというゴリャードキンの詭弁の延長

線上にあることが考えられる。ラスコーリニコフは、犯行後、予審判事ポルフィーリイから、‘凡人非凡人の理論’についての彼の論文が雑誌に掲載されていたことを指摘される。しかし、そこには、「ラスコーリニコフは本当に何も知らなかった」と記されて、彼が論文のことを失念していたことが語り手によって明かされている。したがって、ラスコーリニコフが‘凡人非凡人の理論’を意識に上して犯行に及んだのではないことは明らかである。ラスコーリニコフが‘算術の理論’に支えられて老婆を殺害したことは、テキストから確認される。一方、‘凡人非凡人の理論’は、老婆を殺害した現場に偶然入って来た、老婆の義妹リザヴェータの殺害という不測の事態を正当化し、そこから来る良心の呵責を鎮めるために、主に事後に利用されたと考えられる。よって、‘凡人非凡人の理論’は、ラスコーリニコフの犯行に対して、副次的な位置を占めていると言える。「ラスコーリニコフは非凡人の思想で殺人を犯した訳ではない」との見解をとる清水正氏は、ラスコーリニコフを、『弱い心』の主人公ワーシャ・シュムコフとの係累関係において捉え、その‘弱い心’に注目している。清水氏によれば、ラスコーリニコフの犯行は、「母プリヘーリヤの過度の愛と期待が息子ラスコーリニコフを押しつぶしてしまった」ものとして理解できる。経済的窮状を訴える母からの手紙を一読するや、金貸しの老婆を殺害して金品を奪い取ろうという、それまでは「単なる空想」にすぎなかった「考え」は、「突然、もはや空想ではなくなり」、ラスコーリニコフは、「何が何でも、決行しなければならない」という決意を抱いている。このことを、空想の世界から現実の世界への移行という処女作からのテーマに照らし合わせても、ほとんどの先行研究においてその否定的意味を指摘されていない母からの手紙が、ラスコーリニコフを犯行へ押しやったものとして、‘凡人非凡人の理論’ほどは重要でないとは言い切れないであろう。また、『罪と罰』の第二草稿に繰り返し記された「母の愛情は苦しい」という記述も、母からの手紙が犯行に対して持つ重要な意味を示唆している。ラスコーリニコフが、単に思想の実践としての意味から、犯行に及んだのでないことは、「もし僕がひとりぼっちで、誰も愛してくれず、僕も誰をも決して愛さなかったならば、こんなことはすべて起こらなかっただろうに！<sup>4</sup>」という、彼の内的独白が、物語っているのである。

『死の家の記録』に登場する囚人オルロフは、ラスコーリニコフによって仰がれた「強者」、すなわち、‘非凡人’のモデルであることが考えられる。オルロフは、何事にも動じない強靱な精神を持ち、目的達成に向けての無限の自己統御ができる人間として、肯定的に描かれている。犯行後のラスコーリニコフは、「頭脳と精神が丈夫で強い者」、すなわち、‘非凡人’たろうと望みながらも、人殺し呼ばわりされるや、不動であるべき精神に動揺を来たし、また、リザヴェータ殺害から来る良心の呵責に苛まれてしまう。これは、母の「過度の愛と期待」に負けて犯行に踏み切ったこ

---

<sup>4</sup> ゴシック体は、原文ではイタリック体。

と同様、彼の‘弱い心’に起因する現象であると言える。したがって、‘凡人非凡人の理論’とは、犯行後も、オルロフ宜しく、その頭脳と精神を「丈夫で強い」状態に保ち続けることに挫けたラスコーリニコフが、その‘弱い心’を糊塗するために利用したものであると考えられる。『罪と罰』の皮肉は、‘弱い心’から踏み切られた犯行に、ラスコーリニコフが‘弱い心’ゆえに堪えることができなかったことにある。老婆の殺害は、ラスコーリニコフが空想の世界から現実の世界へと移行することの必要条件であったのではない。彼は、移行することに性急なあまり、殺人という誤った手段を採択してしまったのである。

## 第2章 『死の家の記録』における囚人達を「子供」に譬える表現をめぐって

『死の家の記録』には、ゴリャードキンやラスコーリニコフのように、‘運命を変える’ことに執心する囚人達の姿が描かれており、また、囚人達は「みんな空想家だった」という記述も見られる。このことから、『死の家の記録』を、空想家による、空想の世界から現実の世界への移行、すなわち、‘運命を変える’ことの試みとその挫折を描いた作品として、処女作から『罪と罰』に至る系列の中で捉える必要性が感じられる。『死の家の記録』は、フィクションであるにもかかわらず、ドストエフスキー自身の獄中生活を描いたドキュメントとして、他の作品とは別個の扱いを受けることが多い。しかしながら、作品のほぼ真ん中に描かれた、囚人達による芝居の場면을境にして、語り手ゴリャンチコフの心境が、暗から明へと転じていることを読み落としてはならない。そして、その場面には、囚人達を「子供」に譬える表現が集中的に記されていることに注意すべきである。貴族出であることで多くの囚人達から向けられた排他的な態度も相俟って、ゴリャンチコフは、監獄に来てから間もなく、獄中生活を暗澹たるものとして認識している。しかし、入獄から1年を経て、芝居に興ずる囚人達の中に「子供」を発見したことは、かつての彼らに対する否定的な認識を一変せしめる事件となる。芝居の場面を中心に頻出する‘子供のような’という比喻表現は、「完全に美しい人間」として描かれ、創作ノートでキリストに擬せられている『白痴』の主人公ムィシュキンに対しても度々用いられていることから、ドストエフスキー文学において特別な肯定的意味を与えられた表現であることが考えられる。

『白夜』は、『貧しき人々』や『分身』と同じく、空想家の空想の中での一方通行の恋愛を描いた作品である。主人公の「私」は、1年前に旅立った恋人の帰りを待ちわびるナースチェンカと出会い、恋人が現れぬままに、四夜に渡る逢瀬を重ねるが、恋人の出現により、ナースチェンカは「私」から去る。ナースチェンカは作中で度々「子供」に譬えられており、彼女が、待てども現れぬ恋人に対して見切りをつけ、「私」と一緒になることを言明した場面には、「私」をも「子供」に譬える、「私たちはまるで子供のようなだった」という記述が見られる。『死の家の記録』に集中的に見られる囚人達を「子供」に譬える表現は、キリストに擬せられた『白痴』のムィシュキンの形象と関わる

ものであること、そして、『罪と罰』において、ラスコーリニコフが、空想家であることから脱するのに、キリスト者ソーニャの助けを必要としたことを考え合わせれば、『白夜』において、空想家である「私」が、「子供」に譬えられるナースチェンカを必要とし、彼女との合一が叶った瞬間に、彼女と同じく「子供」のように変貌したことの裏には、恋愛小説としての読みでは処理しきれない、形而上的意味が存在することが考えられてくる。おどおどと話しかけることが女性の心を掴む「方法」であると信じる「私」は、殊更に臆病な態度をとるという策を弄してまで、女性を得ようとする。ここには、「お世辞」を、「女性の心を征服する、偉大で揺るぎなき方法」として、「この方法は、決して誰も欺くことなく、一人の例外もなしに、すべての女性に決定的に作用するので」と語る『罪と罰』のスヴィドリガイロフとの共通点が見られる。スヴィドリガイロフは、ラスコーリニコフの分身的存在であると考えられることから、空想家たちが女性を強く求めることに、ひとかたならぬ意味が隠されていることは確実であると言える。

## 第6章 『罪と罰』におけるスヴィドリガイロフの形象をめぐって

ラスコーリニコフの空想の世界から現実の世界への移行は、作品の最後に描かれたソーニャとの合一、すなわち、キリスト者である彼女との「信念」の一致によって完了している。そのため、ラスコーリニコフと合一するソーニャと、彼がついにその殺害を正当化し切れなかったリザヴェータとともに「子供」に譬えられていることは、空想家に対する女性の役割について考える場合、軽視できないことであると思われる。ジェーヴシキンにせよ、ゴリャードキンにせよ、あるいは『白夜』の主人公にせよ、空想家たちは執拗に女性を追い求めている。また、ドストエフスキーの書簡によれば、『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』は、「神の存在」をテーマとしているが、それらの作品では、「複数の男性による一人の女性の奪い合い」が、そのテーマと絡み合う形で描かれている。これらのことから、空想家が女性を追い求めることや、後期の作品群で連続的に描かれた女性の奪い合いには、「好色」や「淫蕩」とは別の形而上的意味が存在することが考えられる。ラスコーリニコフの分身的存在であるとされるスヴィドリガイロフは、淫蕩一色の人間として否定的に捉えられがちである。先行研究は概ね、スヴィドリガイロフにおいては性的放縦、ラスコーリニコフにおいては老婆の殺害という形で現れたエゴイズムに、両者の共通点を見ている。しかしながら、ラスコーリニコフの妹ドゥーニャへのスヴィドリガイロフの執着は、ラスコーリニコフの老婆殺しと同様、「運命を変える」ための「賭け」としての真剣極まる行為であったことが、『罪と罰』と創作期間の重なる『賭博者』(1866)のテキストから裏付けられる。スヴィドリガイロフの分身性は、この点にこそ求められるべきである(スヴィドリガイロフはラスコーリニコフの分身的存在ではないとする先行研究も存在するが、スヴィドリガイロフの分身性は、ラスコーリニコフとの言葉遣いの近似からも明らかである)。スヴィドリガイロフの妻マルファ・ペトローヴナの水浴中の卒中死

は、一見謎めいたものであるかに思われる。だが、テキストの細部からは、ドゥーニャを夫から遠ざけようというマルファ・ペトロヴナの目論見を嗅ぎ出したスヴィドリガイロフによる、他殺の可能性が浮かび上がる。ドゥーニャとの合一を果たすためには、一度は駆け落ちを阻まれたスヴィドリガイロフにとって、復讐の意味においても、是非ともマルファ・ペトロヴナを殺害する必要があったのである。『ペテルブルグ年代記』に見られる内容から、女性は、空想家が現実の世界へと移行することを助ける役割を担っていることが確認できる。そして、「子供は——キリストの姿じゃないか」というラスコーリニコフの言葉の他、『未成年』や『カラマーゾフの兄弟』に記された内容から、‘子供のような’という表現は、「子供」に譬えられた人物の中の神性とも呼べるものの存在を示唆する表現であることが考えられる。

## 結 論

以上の考察結果から、『貧しき人々』から『罪と罰』に至る作品群の多くは、変奏曲のようにテーマを同じくしていること、‘空想家の、現実への移行の試みとその挫折’という、処女作から書き継がれたテーマは、ラスコーリニコフが「子供」のようなキリスト者ソーニャと合一して、空想家からの‘生まれ変わり’に成功したことで、臨界点に達し、それまで作品の中心に据えられてきた空想家は、「子供」のような、すなわち、キリスト的なムィシュキンへと変質を強いられたことが明らかになる。ほとんどの先行研究は、ドストエフスキーの「神の存在」に対する強い関心は、流刑体験によって呼び起こされたものであるとしている。しかし、それは正しいとは言えない。すでに処女作において、「まるであなたは子供のようなですね」と、ワルワラを「子供」に譬えているドストエフスキーは、空想家の女性との合一の射程のはるか遠くに、神との合一を見ていた可能性が高いと言えるのである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、ドストエフスキーの『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフがいかにして創られたかを、処女作『貧しき人々』から『罪と罰』にいたる主要な作品を綿密に分析することによって明らかにしようとしたものである。

先行研究は概ね、ドストエフスキーの流刑以前と以後の作品の間に断絶を見、それを作者の世界観の変化によるものとしている。そこでは、処女作『貧しき人々』は「清らかな愛で結ばれた心の美しい男女が、貧しいが故に引き裂かれる哀話」と見なされ、第2作『分身』はホフマンやゴッ

リへの模倣的作品と見なされるなど、『罪と罰』とのテーマの連続性は無いとされている。それに対し、筆者は歴史的背景や伝記的事実に拘泥せず、テキストを綿密に読み込むことによって、先行研究によって見落とされていた問題点を洗い出そうと試みている。

筆者は次のように論を展開する。『貧しき人々』の主人公ジェーヴシキン「心の美しい人間」などではなく、ドストエフスキーによって「悪夢」、「罪惡」、「悲劇」などと呼ばれた「空想家」の一人であり、女主人公ワルワラとの「愛」の破局は貧しさ故のものではなく、空想家としての彼の資質がもたらした必然的な結果に過ぎない。同じ「空想家」の資質は第二作『分身』の主人公にも明瞭に見てとれる。『弱い心』、『白夜』、『地下室の手記』などの主人公も同様であり、『罪と罰』のラスコーリニコフにいたるまでドストエフスキーは「空想家」の系譜を形作ったと言える。そして処女作から『罪と罰』まで「空想家の現実への移行の試みとその挫折」という一貫したテーマが存在している。その場合、ラスコーリニコフの犯行の動機として必ずと言ってよいほど指摘される凡人非凡人の理論は副次的意味しか持たず、かわって「空想家」ラスコーリニコフの「弱い心」こそが犯行との関わりで大きな意味を持つ。「現実への移行の試み」はここでも挫折するが、ラスコーリニコフの場合は、それまでの空想家とは違って、ソーニャという女性の「愛」を得ることによって、最後には「現実への移行」が実現することになる。

このように、本論文はテキストの綿密な読みと分析により、多くの先行研究とは違って、『罪と罰』にいたる作品群の主人公はみな空想家であり、そこには、一貫したテーマが存在することを明らかにしようとしたものであるが、その目標は概ね達成されたと言える。筆者の分析方法は一言一句もゆるがせにしないまことに徹底したものであり、かつ、常に作品全体や作品群全体を視野に入れたものである。その有効性は本論文が十分に証明していると言えよう。

本論文には、形式面で多少の不備が認められるほか、作品理解の上で重要な意味を持つ概念に対してやや理解の浅い面があるなど、問題点も指摘されたが、全体としては博士論文として十分なレベルに達しており、筆者は自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有しているという点で審査委員全員の意見が一致した。よって、本論文は博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。